

日光街道物語

杉山正司

1 日光道中の成立

中世：鎌倉街道中道

慶長5年(1600)徳川家康の会津の上杉景勝討伐で小山へ

(1) 交通制度

日光道中の成立：慶長7年(1602)粕壁宿の新宿取立てと伝馬設置

※天正18年説もあり

同年宇都宮町宛に伝馬負担の代償の地子免除

宿場の設置と街道整備は不可分

→五街道の整備 慶長6年東海道から 大動脈 大坂の情勢

伝馬制度	規定人馬提供と継送	50人50疋	5人5疋困人馬
	のち	35人35疋	
	以北	25人25疋	

間口割→所有石高・・・労役→代銭納、役金

↓

専門業者

- ・ 無賃 御朱印・御証文
- ・ 御定賃銭
- ・ 相対賃銭

助郷 定助郷、大助郷、代助郷、加助郷、増助郷、当分助郷

名称の確定 正徳6年(1716)『寛保御触書集成』

(2) 日光御成道と日光御廻道

- ・ 将軍社参

2 日光道中の施設

道幅	5間（「武蔵国道法」、『武蔵田園簿』所収）
一里塚	慶長9年（1604）東海道と中山道から 『日光道中宿村大概帳』天保14年頃
並木	榎55% 松27% 杉8% 460里中357箇所残存 103箇所欠
関所	元和4年（1618）箱根から 松平正綱
渡船場	寛永4年（1625）～慶安元年（1648）日光 栗橋
道標	利根川 房川の渡し→道中最大の障害 （入間川〈荒川〉・古利根川 橋） 30基 南部は大相模不動 越谷以北は日光

3 日光道中の宿場

○『日光道中宿村大概帳』にみる

本陣・脇本陣	門・玄関（式台）・上段の間
	本 東2.1 中1.1 奥1.1 日1.0 甲0.9
	脇 1.3 1.5 1.1 1.3 1.0
問屋場	問屋役 宿の中心
家数	平均 509（10,698）軒 千・宇・古・越・幸
	※延宝8年（1680）112軒
	享保18年（1733）878軒
旅籠屋	平均 41（858）軒
	平旅籠 飯盛旅籠 木賃宿
※商家	『東講商人鑑』安政頃 【資料1】
人口	平均 2,264（47,542）人 千・宇・越・幸
	※延宝8年（1680）1,336人
	享保18年（1733）3,544人

『日光道中分間延絵図』

【資料2】

4 日光道中を旅した人たちのみた越谷

- ・参勤(観)交代 正徳2年(1712) 26家
文政4年(1821) 41家

- ① 古川古松軒『東遊雑記』(天明8年・1788) 【資料3】
- ② 升屋平右衛門『升屋平右衛門仙台下向日記』(文化11年・1814) 【資料4】
- ③ 津田大浄『遊歴雑記』(文化11年・1814～文政12年・1829)
 - ・大相模村大聖寺の不動尊
 - ・埼玉郡大林村川添の桃園
 - ・越谷の駅塩屋吉兵衛の饗応
 - ・越ヶ谷塩吉が振舞兩度の逍遙【資料5】
- ④ エミール・ギメ『日本散策—東京・日光—』(明治9年・1876) 【資料6】
- ⑤ イザベラ・バード『日本奥地紀行』(明治11年・1878) 【資料7】

【資料2】「日光道中分間延絵図」



宇瓦曾根
溜井

高千六百三石餘
武州埼玉郡

越谷宿

粕壁宿
二里廿八町

保照徳岩
三里

小林村



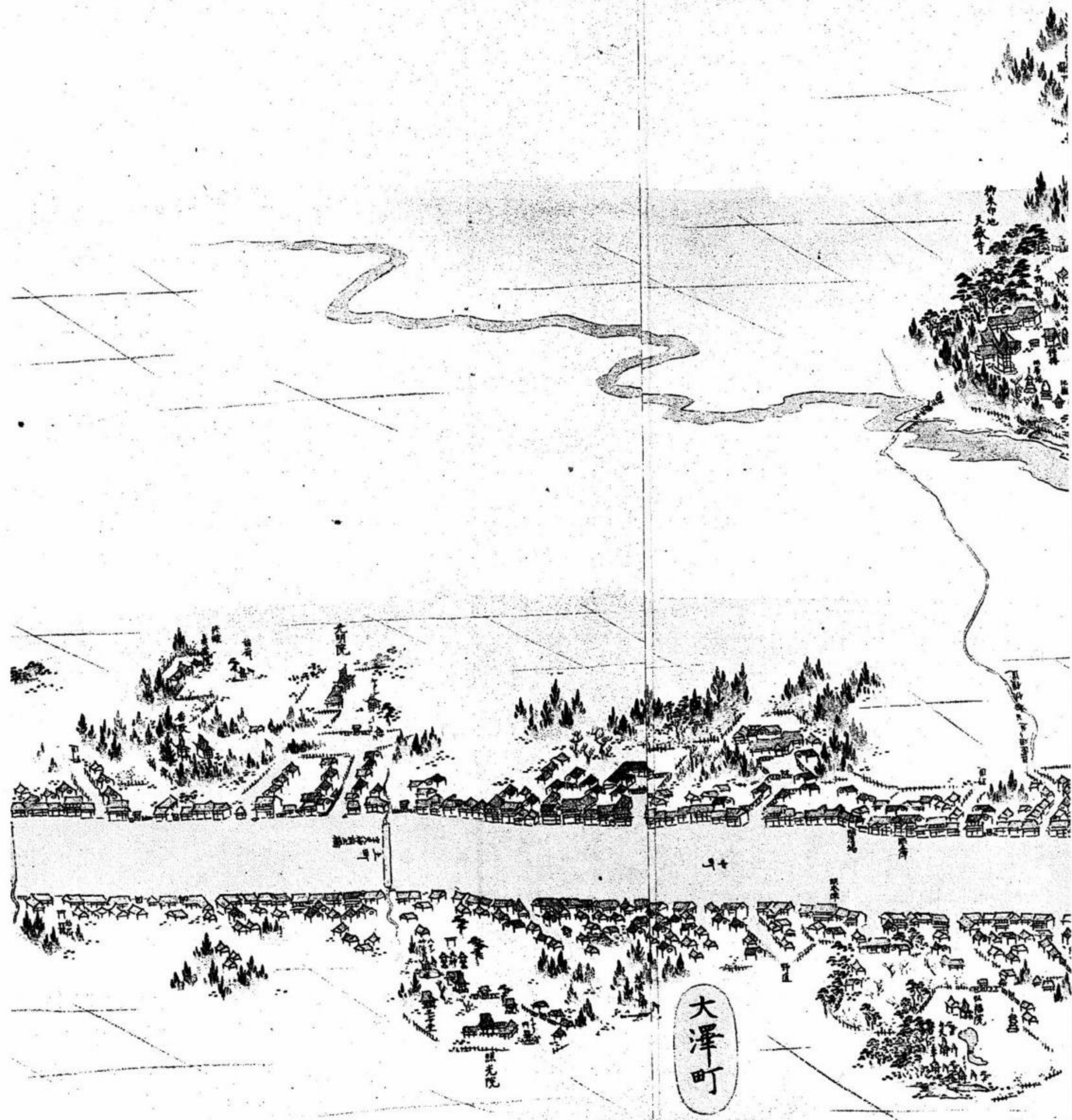
州府十五里十里外五里鎮金嘉慶一港九里五里十里川谷
河川十里外一里半里十里關村十里柳林港合文十里柳林
十里下關關馬柳柳村十里港

日表院

大馬路







大澤町

御朱印地
天蔵寺

浄光院

浄光院

御朱印地
浄光寺

【資料3】

東遊雜記卷之一

予、地理を好んで他邦に遊びし名勝の地、山水のうるはしきをのみ鄙吝を洗ふ助とし、いひしらぬ夷境に行ては見馴ぬ山川を觀て目を遊しめ、山海のひろき詠は萬戸侯の富貴にもまさりしころありて、奥ゆかしきと詠せしみちのくの方によぎらんことをおもひ、東都自勝堂の許にいたりしに、今年よしありて御巡見使に藤澤要人君*・川口久助君*・三枝十兵衛君*従ひ奉りて、奥羽の二州蝦夷松前の地に往のさいはひを得たり。東遊雜記してこゝにその地の風俗名所舊跡を圖し、事蹟の大概をしるして東遊雜記として名づくるものなり。

御巡見使、五月六日東都御發駕ありて、千住の驛に御やすみなり。この所まで江戸日本橋より二里町續きにして、ゆきゝの人も多く、娼家も數多ありて賑々しき驛なり。いにしへ、千壽の前といひし白拍子はこの地の産といふなれども詳ならず。

戸根川は驛の南に流れて橋かゝれり。大橋と稱す。隅田川の水上にして、舟にて往來すれば隅田川の渡場まで僅に一里なり。江戸にて深川と稱するも此川の流にて、惣名は戸根川といへり。みなもとは、島山・本田・中津川などいふ信州の界より流れ出る川なり。

千住驛二里七町草加の驛、一里三十町越谷の驛に御止宿。越谷は長き町なりし。家造り草ぶきにて見ぐるしき驛所なり。此街道より西東南北を見るに、目にさへぎる山さらになし。晴ては北に筑波山、西に日光山遙に見ゆる斗なり。月の入べき山もなしとよみしは江戸より此邊までの事にして、往古の武藏野の原なるべし。

越谷驛より粕壁の驛まで二里廿五丁。このところよき驛にて娼家多し。

古戸根川と稱する川あり。寛文のはじめの頃までは、刀根川この地に流れしに、洪水によつて今のごとく川筋替りしといふ。

粕壁の驛より一里半幸手、二里廿二町栗橋。この所は伊奈半左衛門どの御預りの御關所にして、往來の人を改る事嚴重なり。しかれどもひろくせし平地なる故に、二三里づゝもまはり路をすれば、婦人通行のぬけ道幾路もありと、土人物語なり。是らも上の御仁政なる故か。

戸根川は源廿四里、幾筋となく川々流れ落て、栗橋の上にて一流となる。聞しよりは大河にて、世に坂東太郎と稱せるは此川の事なり。二百石積斗の船の川船ありて江戸へ往來す。左右の堤も砂塘にて、やゝもすれば水溢るゝ所にて、既に天明午年の夏、洪水にて堤きれ數人死亡せしといふ。此邊は石のなき所にて、家作りには石を用ひず、みなく土藏つくりとす。所々に二三百軒づゝの町見ゆれども、五畿内・中國筋とはちがひて、おのゝ草ぶきの家づくり、いと見苦し。

栗橋の驛所は、中田の驛まで二里といへども甚近し。故あるべし。戸根川御渡の時は、古河の城主土井侯七萬石なり。御馳走として御座船三艘を出されける。中田の驛は利根川の渡り上りの所にて二百軒斗、あしき驛なり。

中田より一里廿町、古河に七日御止宿。此所は土井侯の城下にして、市中千軒ばかり。下總の國と下野の國界は、古河より二十町ほど北にあり。利根川をもつて兩國のさかひとせしより川筋つきかはりしによつて、下總の國帯のごとく武藏野と下野國とはさまれてあるなり。此街道筋は上方・中國にもなき廣き道にて、松戸の邊よりは北に筑波山、西に日光山、晴ては南に富士山を見る所なり。すべて此郷中は海魚いたつて不自由にて、鯉・鮒・鯰・鰻澤山なり。味ひ佳なりといふ。

古河二十六町下野國野木の驛、二里間々田御休。一里二十四町小山の驛。此所より日光山の道あり。一里十一町芋柄の驛、廿八町小金井、一里半石橋の驛、一里半雀宮の驛、二里二町宇都宮城下御止宿、城主戸田侯千石七萬八。小金井の驛よりは街道の並木しげく、日影はいふは及ばず雨も

【資料4】

文化十年仙台下向日記

二月三日 晴。早朝より追々客来。到来物等は別番に記之。午後より船に(仙台)て上屋敷へ出。夫々廻動。帰路、大松沢丹宮様にて御饗応有之。是亦別番に記之。二更、帰館。途中より雨に成。

四日 雨天。朝之内、若山静虎殿入来。

御屋敷役加藤氏初、夫々到来之菓子并肴等贈る。

夕方、加藤氏初、明日出立門送に御出之事。

五日 曇。(付)泊付此所に可書

五日	六日	七日	八日	九日
粕壁	間々田	大田原	白川	郡山
十日	十一日	十二日		
越河	岩沼	御城下入		

卯時、深川出立。喜右衛門、千住迄送る。平井氏は上屋敷より出立。今夕泊にて御出会可被致御約速也。巳時、千住、仙台屋へ立寄休む。此町、青物之市あり。到てにきはし。往々、晴。風景更になし。申時、粕壁駅、本陣小沢栄蔵方に宿。平井氏、酉時前御着也。御宝器等領江州足輕兩人は、江戸にて被帰、江戸よりは御国御小人兩人率領なり。

永幡万之丞と云。板橋久五丞

夕飯、汁干大根 皿 うと 平 長いも、椎茸 猪口 蓮根
するめ かんひやう みそあへ

六日 雨天。

朝飯、汁菜 平 海苔、八盃豆腐 焼物 にひたし 中焼鮎 (串カ)

奥海道は此辺より倡家多し。見苦敷事言ん方なけれとも、処之者は平氣也。今日之路至て悪し。栗橋之御関所迄に、駕籠を五度落す。

此節日光御普請有之由にて、御勘定役并御普請役九頭御通行にて、路騒々し。(判)戸根川を船にて渡。風雨強、困りたり。風景更になし。暮前、間々田駅、脇本陣連野良助方に宿。

夕飯、汁干菜 皿 うと 平 鴨、ねんしん 焼物 金頭

七日 快晴なれと、道愈悪し。

朝飯、汁干大根 皿 干大こん、菜 平 のり 八杯 焼物 鮭 わかめ 豆腐

此辺、各草ふきの家造にて見苦し。古河之城下より廿丁程北に、武州・野州之界有。街道筋広し。東南に筑波山、西北に日光山を望む。小山之駅を半道斗過て、日光山へ之追分道あり。並木繁く、日影も漏ぬ様なり。風景なし。雀之宮駅に、藤白屋・羽生屋と云家号を見る。上方には無之、珍し。宇津宮駅町、当正月廿一日之大火、凡六千軒余之処二千軒斗焼、死人・怪我人も余程有由、人足之者嘸にて、則、見て通る。いたましき有さま也。夕方、白沢駅、脇本陣福田源右(衛)門方に宿。寄石家と見へ、床脇に烏帽子石二つ有。夜に入、本陣宇加地太郎左衛門見舞に來。

八日 快晴。大霜、大寒。

朝飯、汁干大根 平 牛房 皿 玉子ふわく

前日より、言つかい余程聞へかたし。氏家之駅、家毎に竹之先に箱(花)をくより付、門口に皆々あり。土人に問へば、卯月八日之上方にて花之心、并針之供養とて如是し。処かわれは珍敷事も有也。往々、あくつ川、余程大河なり。土橋三処なり。喜連川駅より作山之駅(佐久山)迄、道大に悪し。或は右し、或は左す。人足大に難儀之様子なり。申時後、大田原駅、塩屋甚右(衛)門方に宿。此駅、売女別て多し。

夕飯、汁大こん 平 鴨、いも 坪 のりかけ ねんしん 八杯豆腐

九日 快晴。大霜。

朝飯、汁大こん 平 こくしやう、いも、こんやく 焼物 金頭 豆腐、椎茸

【資料5】『遊歴雜記』

越ヶ谷塩吉が振舞両度の逍遙（五篇下四十八）

（前略）然るに越谷の駅西裏手大林の川すじの螢ハ至て大きく 殊更沢山なる事目を驚せり 出盛る時にいたりてハ毎夜く数万億の螢ハ幾処となく 大き鞠ほどに一堅まりとなり 須臾に水上に落て散乱す ほとたる合戦と賞して好事の人ハよなく見物に罷るよし 越谷界隈の人に聞合するにミな大同小異にして虚談ならず 是むかし有徳尊君宇治の螢を放させ給ふものと預て聞居しが 一度ハ見たきものと伊能小原の両輩を誘引 就中伊能永鯉ハ面を能し狂歌誹諧 少しハ三味線をたしなミ取分一節伐を吹に感応なれば 一兩日越谷の駅に遊ばんものと誘引しかど 自他の稽古いそがしく差繰がたきに付 頃は文政八乙の酉年六月十日 小原通齋を同道して朝涼に出宅し箕の輪に憩ふ

（中略）

程よき樹の枝に丸き大挑灯を釣下置たり 斯て床机に円座をくばり吉兵衛われらと三人衆座して水上を見渡し納涼するに 兩岸の叢より四ツ五ツづゝ螢火の出るよと見えしが その間前後三四町ばかり須臾の間に数万のほたるとなり 爰に飛彼所にあそぶ風情面白ふして如何ともいひがたし しかるに油屋の宅より若き者ハ御膳籠荷ひ来り 重詰 吸筒 昆炉 急火焼等を取出し 酒杯をめぐらし 後にハ丁稚交々大団を以て蚊を追 邂逅にハ往來の人ありて螢火の景色によどむといへどもめづらしく思ハぬ故にや久しくハ立留らず 元より悪口一言いふ人なければ こゝろ穩にして隨意に飲宴して長流になぐさむ 扱又兩岸より飛出し数万のほたるハ 幾処もく一緒に群り集りてあそぶ風情

なれど 大き小女が弄ぶ手鞠ほど一堅まりと成 漸く水上をはなるゝ事式尺ばかり しばらく螢火は丸くなくと見るうちに 吹來る川風に散乱し又ハ落て水上に散乱するあり 或ハ手鞠ほどに堅まりし螢ハ水上に落て三ツ四ツに分れて流るゝもあり 此川筋前後三町程の間此の如しとなん 宇治のほたる合戦ハ見ざれども 此川はゞの技群広くして螢の夥しき事やらんと推量し 又筑紫のしらぬ火も争か是にハ勝らんと思ひ 悠々然として螢火になぐさミ夜景を愛す 凡酉の初刻より戌の刻過るまで飲宴しあそびしが 夜陰の川風涼しく寒きが如く手足の冷やかなりしを覺ふ

（中略）

往返一里のまはり路といへどこれよりまくりの立場へ出 聞およぶ鰻魚に昼餉したゝめんと くだく敷閑道凡巷里余を過 名にしおふまくりの立場へ出けり 則ち小綺麗の垣生の食店に憩ひ鰻魚を焼せ食し見るに 東都に比ぶれば一段貧し 彼印場沼の傍なる中村の鰻に少しハ勝らん歟 炎天の暑さ焚が如く堪がたければ 座敷の片隅にしばし臂を枕にせんと思えど 蠅多くして忍ばれねば 片時もはやく油屋が宅へ越て一睡せばやと 是より式拾余町日盛の駅路を扶け合つゝ吉兵衛方へ立戻りぬれば 先刻より侍り何方にあそび給ひしやと尋ねにつゝミがたく 聞及びしまくりへ廻り鰻魚を給候ひしといへば 主笑ひてまくりの鰻ハ江戸の御人にハ上られまじ 後刻焼せ御振舞申さん喰比給へといふにぞ

て約束の蒲焼を大皿に積上持出しき その分量江戸の魚店にて三百疋を申付るともかほどハあらじと思えり 頓て主出來り御延慮なく飽まで召上り下され候へ 我等も御相伴申さんと挨拶して 頓て給仕の膳及び鰻を持出しを見れば中皿に積上たり 主の曰 われらハ鰻よりハ鯰好物也 則ち是成ハ鯰の蒲やき也 大事なくハ召上るべしと会釈し 一緒に箸を取て鰻を味ひ見るに甘き事奇々妙々 又柔らかに焼加減江戸の如くまくりの蒲やきとは同日の論にあらず 予いえらく 扱々絶妙の風味に候へ 人に対し席によりてハ不塩梅をも譽るが客振に候へど是ハ左にあらず 実に古今に独歩せし風味かやうの魚かゝる焼加減は江戸にも沢山はあらじ 名たゝる大和屋 深川屋 大和田 福本 鈴木 なんと能魚遣ふ評判あれど争かこれに勝らん 扱々甘き事にて候へ 江戸前と申魚にや色の青ミある節と申類にやと問ふに 主對て魚は此川筋にて取候 江戸前すじなど申類ひにあらず 江戸の方言に旅鰻と申ハ是ならん しかれども焼様に仕方ありてかくの如し 最初の初めしらやきにしたるを温なる内に重箱様の物へ入少しの重しを置て蓋してむらし候 扱たまり三合に味淋一合 白砂糖式拾匁ばかり合して能煮立 醒して後鰻をひたして焼なり 火勢弱く久しくあぶれば焦てあぶらを失ふ 強き火を以て一旦に焼上るゆへかくの如しといえり かゝれば魚にハよらずやき加減第一と見えたり 甘き事食する内に身体肥るが如くおもえり 通齋ハ南鐙づゝの蒲やきを喰腹なるによつて式拾四本を食し 予ハ拾三本を食して口腹を悦ばしめき 主も給仕も取々に誂けれども余りの甘さに飯を喰過ぬれば 満腹してもはや一本も給がたしと断ければ 左あらば御酒をバ後刻上候ハんとておのゝ食器取入たり

再び出発し、昼食の時間にやっと越谷 Koshi-gaya に止まる。^(注4) ホテルは川のほとりにあるので、新鮮な魚を食べられると期待する。しかし日本では、海魚のサービスが十分にゆき届いているので、もはや川で漁をする苦勞はないが、今のところ海の鮮魚は届いていなかった。^(注5) バテルのように自分の腹を開くことなく——このことはしかも日本人の思想にならっているようだが——料理女たちは、若鶏の狩にとりかかる。その結果は疑わしく思われる。

一人の女中が、小さな神道のお堂の階段に腰を据えて、人力車夫の米を研いでいる。それは確かにわれわれの駿馬のからす麦である。しかし、われわれのは？ 用心して持参の食糧に頼るのがたぶんよいだろう。何かわれわれのための昼食が作られるまで、散歩をし、そして観察しよう。それは、われわれ旅行者の役目なのだ。

台所を訪ねる。すべてきちんと片づいていて興味を引くが、このたくさんの奇妙な形をした異常な色のガラス瓶や小さな器は、台所というより薬局の観がある。食糧を盛り付けているコック長の威厳は、コックというよりはむしろ医師を想起させる。

おや、めった打ちにされてきたような男を見た気がした。赤い斑点と青い帯、まるで傷だらけの背中のようにだ。それは傷ではなく、芸術的にデッサンされた刺青をした人足であった。背中の中、典型的な美人画が点描されている。

若鶏が捕らえられ、缶詰めの缶が開けられるまで、われわれに昼食の給仕をすることになっている若い娘の一人は、ごく小さいパイプ「煙管」で、静かに煙を立てている。彼女は、われわれが通りかかるとはほえみ、義務的ではあるが愛想のよい言葉をわれわれにかけても、理解してもらえないので、ひどく残念がっているように見える。彼女が両足に履いている高い下駄 *tabis* は、芝居小屋の案内嬢の小さな腰掛を思い出させる。これを履いたらたえず風邪をひくだろうから、われわれはこの不便な自分たちの靴を履かなければならないだろう。できるだけ、履かないようにしよう。

食卓につこう。いや、とにかく部屋の座の上に身を投げ出し、食卓もなくじかに食べよう。生まれて初めてパンを見、ジャムを見つめる女中たちの大きな感動。彼女たちは、これらの食物の作り方を長々と説明してもらって、ひどく仰天しているようだ。そしてさらに説得するために、われわれはジャムを塗ったパンを彼女たちに提供する。彼女たちは赤くなって受け取り、あたかも禁断の木の実でもあるかのように、不安そうにじろじろと見るが、思い切って噛むことができない。

われわれは出発する。この若い娘たちが、われわれのぶしつけな眼差しが遠去ってからパンに塗ったジャムを意を決して食べることを心の中で望みながら。

大した出来事もなく、オガサ *Ogasa* 「大沢の誤りか」を抜け、泊まる予定の幸手 *Sagami* に到着する。

^(注6) 旅籠はかなり大きく、紙の壁「襖」を天井と座につけられている溝の中をすべらせて、ただちにわれわれのために部屋が整えられる。台所を通して入らなければならぬ。

台所は常に人目につくように道路に面していて、腐ったかぶらの臭いでお客を引き付けるかのようなのである。出入口の右手の内側に、ポンペイにおけると同じように、小さなお堂に家の守護神が入れている。

わが人力車夫たちは、十時間走り続けて疲れているが、もはや何も急ぐ用はない。ただ昔風の風呂に入るだけだ。熱い湯につかり、冷水で洗う。これは『ジル・ブラス』の著者によって模倣されたラテンの小説の詳述された部分を思い出させる。^(注7) アブレイウスの本文では、山賊たちは自分たちの住んでいる洞窟に着くと、老いた女中に、入浴のために水を温めるよう命じるのだ。^(注8) ル・サージュの作品では、入浴は削除されている。日本の車夫たちは古代派である。

この家の端のわれわれの部屋の前に、小さいが趣のある庭がある。縮小した大自然。これは言うことのないほど非常に風情があるが、臭いが……。まったく、日本の家の例の特徴的なあの臭いときたら。そしてまるで思い違いでもすると思っているかのように、また発散物だけでは案内が不十分であるかのように、無数の限定詞が、旅行者に必要な場所を知らせている。すなわち、人目を引くうごきの脚、水を満たしたブロンズの鉢と簾の簀子の上に置かれている軽いひしゃく、その上に吊るされ洗浄の後で指を拭く青と白の手拭 *tanogoni*。そして他人の

目からさえぎるために作らされた細い竹の小さな垣根。最後に神聖な入口に、不浄な接触をすべて断つように、入る前に履く藁の二つのサンダル。しかし、これは往々にして無駄な用心である。というのは、この嗅覚にとつて耐えがたい場所は、ほとんどぜいたくなほど清潔だからだ。

どうしても慣れなければならぬ。こうした不都合があるにもかかわらず、われわれは陽気に夜食をし、食事の後、女中たちがわれわれの蚊帳を吊っている間、若いコックのジローさん^{ジョー}は、三味線の音楽会を催してくれる。

ジローさんは名手である。調子外れに演奏するからだ。彼は自分の不愉快なギターに、軽くささやくように声を合わせる。その声は、楽器の調子外れのメロディを正確に表現する。ときどき熱狂して、鼻や締められた喉から発せられる彼の声は高くなる。彼は非常に幸せそうだ。通訳たちは陶醉している。彼らは演奏者と一緒に小声で歌っているが、少し下手である。つまり少し正確なのだ。単なる愛好家たちと本当の芸術家との間に存在する相違がよくわかる。

しかしいったい、間違っているのはどの民族なのだ？ アジア人なのか、現代のヨーロッパ人なのか？ 古代ギリシア人なのか、コンセルトワール^{コンセルトワール}（一七九五年創立のバリの国立音楽院）の教授なのか？

神経をとがらせて、私がコックの音楽の誤りを聞いている間、レガメは絵になるシルエットを求めて、人気のない通りを散歩している。

朝、家を取り壊す音で起こされる。たたいたり、ぶついたり、取り外したりするたびに、光が部屋に広がる。家が分解されるのだ。外壁の役をしている木製の雨戸を取り払い、戸棚の中に紙製の仕切り^襖を片付ける。女中たちは蚊帳を外す。そしてわれわれは、小寝台から出てもないのに、野外にいる感じである。田園から来る朝の風で涼しい。

数分後、われわれは車の中にいる。車夫たちは睡眠で疲れを癒し、元気一杯で行く。栗橋^{Karibashi}で休憩。レガメは庭の灯籠を書きとめる。すべてが絵になるように利用されている。ひき臼の古い砥石でさえもそうだ。それが現代の装置によって抹殺されるにせよ、あるいはまたアラビアの石臼とか、古代ローマの石臼を逆さにした漏斗の形をしているにせよ。

川が現われる。利根川^{Tone}で、橋がないのに渡らなければならない。この川はさしあたりひどく恐ろしくはない。われわれは車夫や車と一緒に、大きな渡し船に乗せられる。しかし、船は対岸まで着かないのだ。そのあと、荷物と旅客はすべて、人間の背中で運ばれるのである。ここではすべての苦役が一つの喜びのようだ。われわれと同時に渡河するきれいな日本の女性たちは、運搬人の首に陽気にしがみついて、非常にびくびくしながら、女性騎手の難関をやっと乗り越える。

景色は雄大になる。高い火山が地平線に現われる。右手には筑波^{Tsukoubaba}の死火山の尖峰が現われる。道路は、巨大な並木に縁取られている。

あちこちに、宗教的記念建造物、寺院、庭園、村があり、それらを郊外電車の速度で通り過ぎる。そんな速さが、住民たちを驚かせているようだ。日本の旅人は普通こんなに急がないのだ。われわれの車夫は、車ごとに二人が付いているので、どうしてもスピードで金を儲けなければならない。というのは、一人のヨーロッパ人を引くのに、二人の人力車夫が必要であるとしても、普通はたった一人の車夫が二人の日本人を大急ぎで運んでいるのを、われわれは知っているからである。

休憩のときに、日光から帰る人力車に出会う。緊急の用事で一気に行って戻って来たのだ。両手で車を引いて、四十八時間に七十二里走破したことになるだろう。



48. 昼食の給仕をする若い娘
(本文131頁)



47. 刺青をした人足(本文131頁)



50. ジャムつきのパンを見つめる女
中(本文131頁)



49. 幸手の旅籠の台所
(本文132頁)



45. お堂の階段で米を研ぐ女中(本文130頁)



46. 北へ向かう

私たちはよく人の往来する街道に沿って粕壁まで水田の間を一日中旅をした。粕壁はかなりの大きさの町ではあるが、みじめな様子をしている。その大通りも、東京の最も貧弱な街路に似ている。私たちは大きな宿屋でその晩を泊ることにした。この宿屋は、階下にも二階にも部屋があり、大ぜいの旅人がおり、多くの悪臭があった。宿屋に入ると、宿の亭主が、両手を組みながら平伏し、床に三度、額をすりつけた。それは大きくて老朽の建物で、少なくとも三十名の召使いが大きな台所で忙しそうに働いていた。私は黒く磨かれた木のけわしい階段を上って階上の部屋に入った。部屋には深い軒下の縁側がついていた。この家の二階正面は、一つの長い部屋で、横と正面しかないが、不透明の壁紙が貼ってある襖

を敷居の溝にはめれば、直ちに四つの部屋に分けることができる。背面も即席で作られる。しかしこれは、私たちのティッシュペーパーに似た半透明の紙を貼った障子で、ところどころに穴や裂け目があった。この仕事が終わると、私は約一六フィート平方の一部屋をあてがわれた。部屋には、かぎ、棚、手すりなど何か物をかけるものが、一つとしてなかった。部屋は要するに空っぽで、畳しか敷いてなかった。マットという言葉を使ったが、誤解されると困る。日本の家のマットは、タタミと呼ばれて、最もりっぱなアックスミンスター絨氈と同じほど、清潔で優雅で柔かい、床の敷物である。畳は、長さが五フィート九インチ、幅が三フィート、厚さが二インチ半である。枠組は粗い藁で堅固に作られており、非常に織り目の細かい畳表に包まれていて、ほとんど真っ白である。どの畳も、紺色の布で縁をつけてあるのがふつうである。寺院や部屋はふつう、その中にある畳の数によって大きさが測られる。部屋

に合せて畳を裁断するのではないから、畳敷に合せて部屋を作らねばならない。部屋は、常に平坦で、床のまわりに磨かれた敷居や、つき出た棚がある。畳は柔らかで弾力性があり、質の良いものはとても美しい。畳は最上のブラッセル絨氈ほど高価であり、日本人は畳を非常に誇りにしている。だから心ない外人たちが汚れた靴で畳の上に踏みこむようなことがあれば大そう困ってしまうのである。不幸なことだが、畳には無数の蚤がついている。

私の部屋の外側には開放された縁側が走っている。縁側は多くの似たような部屋に接続し、傾きかけた板葺き屋根や天水桶のわびしいたたずまいの軒下をめぐっている。どの部屋も満員であった。伊藤は、この時だけ私の指示を受けて、黴臭い緑色の麻の粗布で作った大きな蚊帳の下に私の携帯用ベッドを広げ、私の浴槽にお湯を満たし、お茶や御飯や卵をもってきたり、私の旅券を宿の亭主のところに持って行って写させた。それが終わると、どこか知らぬところに去った。手紙を書こうとするのだが、蚤や蚊がうるさかった。その上さらに、しばしば襖が音もなく開けられて、幾人かの黒く細長い眼が、隙間から私をじっと覗いた。というのは、右隣の部屋には日本人の家族が二組、左隣の部屋には五人いたからである。私は、障子と呼ばれる半透明の紙の窓を閉めてベッドに入った。しかし、私的生活の欠如は恐ろしいほどで、私は、今もって、錠や壁やドアがなくても気持よく休めるほど他人を信用することができない。隣人たちの眼は、絶えず私の部屋の側面につけてあった。一人の少女は、部屋と廊下の間の障子を二度も開けた。一人の男が——後で、按摩をやっている盲の人だと分ったのだが——入ってきて、何やら「もろろん」わけのわからぬ言葉を言った。その新しい雑音は、まったく私を当惑させるものであった。片方ではかん高い音調で仏の祈りを唱える男があり、他方ではサミセン(一種のギター)

やばちゃという水の音で、外ではドンドンと太鼓の音がしていた。街頭からは、無数の叫び声が聞え、盲目の按摩の笛を吹く音、日本の夜の町をかたらず巡回している夜番の、よく響き渡る拍子木の音がした。これは警戒のしるしとして二枚の拍子木を叩くもので、聞くにたえないものだった。それは私の少しも知らない生活であった。その神秘は、魅力的というよりもむしろ不安をかきたてた。私のお金はその辺にころがっていたから、襖から手をそっとすりこませて、そのお金を盗んでしまうことほど容易なことではないように思われた。井戸はひどく汚れているし、ひどい悪臭だ、と伊藤が私に言った。盗難ばかりでなく、病氣まで心配せねばならない！私はそのようなことをわけもなく考えていた。

〔原注〕私の心配は、女性の一人旅としては、まったく当然のことではあったが、実際は、少しも正当な理由がなかった。私はそれから奥地や北海道を二〇〇〇マイルにわたって旅をしたが、まったく安全で、しかも心配もなかった。世界中で日本ほど、婦人が危険にも不作法な目にもあわず、まったく安全に旅行できる国はないと私は信じている。

私のベッドは、二本の横木に釘づけした一片の麻の粗布にすぎない。私が横になると、その粗布は下方の釘の列から裂け目を作りながら破れてしまい、だんだん身体が沈んで、ついには二組の架台を結びつけている棒の鋭い背中に横たわって、蚤や蚊の犠牲者となり、全くお手あげの状態となった。私は三時間の間、身動きもせずじっと横になっていた。動けばベッドが全部崩れてしまう、と思ったからである。そして一瞬間ごとに不安の気持ちが強くなった。そのとき障子の外の伊藤が声をかけた。「バードさん、お目にかかってお話ししたいことがあります」。こんどはどんな恐怖だろうか、と私は思った。彼はつけ加えて「公使館から使いの者が来ました。それから二名の警官があなたにお話ししたいそう

「す」と言ったが、私の不安はおさまらなかつた。私は到着したときに正しい手続きをとっていた。宿の亭主に旅券を渡し、彼は規則に従ってそれを宿帳に書き写し、その写しを警察署に送ったはずであつた。だから、このように真夜中近くになつて部屋に侵入されるとは、不当であると同時に理解しがたいものであつた。それにもかかわらず、制服を着た二人の警官が現われたとき、すぐに私はほつとした。彼らは例の警棒と目玉ランプをもち、態度は丁寧であつたが、ペコペコしなかつた。私は彼らが二十人やつてきても歓迎したであらう。というのは、彼らの出現によつて、私の名が登録されて彼らに知られているという事実を確認できたからである。それから日本政府も、特別な理由により、外国人に政府の全知全能ぶりを印象づけたいと思つているから、私の安全に対して責任があるのである。

彼らが彼らの暗いランプの光で私の旅券を書き写す間に、私が東京からの小包を開けると、中にレモン砂糖漬一缶、サー・ハリー・パークスからのたいていそう親切な手紙、それからあなた(妹)からの手紙一束が入つていた。手紙を開けようとしてみると、伊藤と警官たちとランプが、私の部屋から静かに出ていった。それから私は、夜明けまで、まんじりともせずベッドに横になつていた。私が六週間も待ちこがれていた手紙や電報を開けもせず!

今では私は、そのときの恐怖や不幸なことを笑いとばすことができる。旅行者というものは、自分の経験を贖わなければならない。成功するのも失敗するのも、主として個人的特性によるものである。多くの問題も、旅を重ねるにつれて経験を積むことにより改善されるであらう。そして安心して旅行をする習慣が身につくことであらう。しかし私ブライバツ的生活の欠如、悪臭、蚤や蚊に苦しめられることは、これから先も直らない弊害ではないかと思われる。

翌朝、七時までに御飯を食べ終り、部屋は、今までだれも泊つていなかったように空っぽになつた。八十銭の宿料を払つた。宿の主人や召使いたちが、何度もサヨナラを言つて平伏していた。私たちは人力車に乗り、速いスピードで去つた。最初の休憩所で私の車夫は、親切でやさしい男だが見るも恐ろしい痛みと吐き気に襲われた。粕壁で悪い水を飲んだためだという。そこで後に残しておくことにした。彼は契約を厳重に守つて代りの者を出し、病気だからといつてチップを請求することはなかつた。その正直で独自のやり方が私にはたいへん嬉しかった。彼はとても親切で役に立つ男であつたから、病気のまま彼をそこに残して去るのは私にとって実に悲しかった。なるほど彼はただの車夫であり、日本帝国三四百万人中の一人にすぎないけれども、やはり天におられる父なる神から見れば、他のなんびとにも劣らず大切な人間なのである。その日はよく照る日で、木蔭で八十六度もあつたが、むし暑くはなかつた。正午に利根川に着いた。